

# 魯州和尚『山居詩和韻集』《資料紹介》

笹尾 哲雄

## 解説

『山居詩和韻集』の作者、魯州和尚（二七三五―二七七九）は、諱を碩愚といい、秋田県仙北郡六郷町の太桂寺（妙心寺派）六世である。京都の相国寺山内の慈雲庵の大典禪師（顕常）の門人であり、『日本詩選』に一首が収録されるほどの詩僧であった。

『山居詩和韻集』は、魯州最晩年の安永八年（一七七九）二月に著されたもので、禪月大師貫休の『山居詩』二十四首（『禪月集』卷三所収）に和韻したものである。本書に史料として収録したものは、秋田の漢学者、人見蕉雨（一七六一―一八〇四）が筆写したものと考えられる。原本は県立秋田図書館の所蔵で、巻頭に「大正七年十月廿四日購入」の書き込みがある、きわめて貴重な抄本である。同書の題簽並びに内題は共に『山居詩』とのみ記されているが、禪月大師の原詩との区別がつかないので、今回は仮に『山居詩和韻集』と題させて頂いた。原詩である貫休の『山居詩』については、西口芳男「貫休『山居詩』試訳注」（『禪文化研究所紀要』第二号・二〇〇二）に詳しく述べられている。

魯州は、紀州由良の興国寺の黙州祖漸、秋田藩士の吉田夢鶴、雲水時代の古田梁紹岷などと親交があった。黙州は、魯州の一周忌に「祭魯州禪師文」を書いており、『関南集』に収録されている。

また吉田夢鶴は魯州と詩文を交わしており、『余脛録』（人見蕉雨著）には、魯州が相国寺の梅逸庵から出した尺牘が収められている。

更に古梁紹岷（仙宮瑞鳳寺）は、江戸の東禅寺の徒弟時代から魯州に師事し、魯州は「東都東禅寺徒紹岷、酬岷公道友見寄」という七言律詩を作っている。

魯州は病弱で、『山居詩』を著した半年余後の安永八年九月二十日に四十三歳の若さで示寂した。

その他、魯州について詳しいことは、拙著『秋田県名僧列伝』『近世秋田の臨濟禪』を参照されたい。

尚、原本の抄本は、楷書ではなく書き崩してあるため、読み取りにかなり苦心した。そのため万全を期したつもりではあるが、誤読がある可能性がある。読者の批評をお願いする次第である。

資料の打ち込み作業については教学研究委員会の委員各師の御協力を賜り、また付注作成については長性寺住職野口善敬師の手を煩わせた。末尾ながら記して感謝申し上げます。

## 山居詩和韻集〈原文〉

### 〈凡例〉

- 詩二十四首の頭には便宜的に「(一)」「(二四)」の番号を付けた。
- 原本は半丁十行・行二十一字(注は二字下げの行十九字)である。
- 原本の文字は本字と略字が入り混じっており、活字化に当たってはなるべくそのまま忠実に再現した。
- 句点については、明らかでない誤りは訂正し、不足している部分は付加した。
- 語句の原注の典拠については、分かる範囲で出処を注記した。
- 文字の誤りについても、意味を理解するのに問題がある個所については注記した。

### 山居詩和韻集序<sup>①</sup>

予往年在于洛西衣竇興雲洞下。和唐禪月大師休公山居詩二十四首。每章用韻。近歸桑梓。住止村院。日與田夫樵者爲爾汝交。偶得其蘂於弊笥中。而以其事實多出於禪書。或難其解。請自注焉。奈寒鄉之書。半出暗記。非唯不能備悉。魯魚亦不少。禪月自称。風調野俗。豈可聞於大雅君子。況於予乎。陶生不言乎。若識琴中趣。何勞絃上聲。<sup>②</sup>

安永己亥春二月

魯州愚自題

(1) 自序には文題がないため仮に「山居詩和韻集序」とした。

(2) 旁「聞」の崩しにも見える。

(3) 安永己亥西曆一七七九年。

唐禪月大師貫休略傳

釋貫休。字德隱。俗姓姜氏。金華蘭谿登高人也。七歲父母雅愛之。投本縣和安寺圓貞禪師。出家爲童侍。日誦法華經一千字。耳所暫聞。不忘於心。與處默同削染。隣院而居。每隔籬論詩。互吟尋偶對。僧有見之。皆驚異焉。受具之後。詩名聳動於時。乾道初。謁吳越武肅王錢<sup>1</sup>。因獻詩五章八句<sup>2</sup>。甚愜旨。遂刊休詩于碑陰。見重如此。休善小筆。得六法。長於水墨。畫羅漢。得來和尚<sup>3</sup>。晚歲止於荆門龍興寺。至梁乾化二年<sup>4</sup>。終于所居。春秋八十一。塔号白蓮。内翰具融。序師詩。盛行于世。云々。嘗作山居詩。自序曰。愚咸通<sup>5</sup>宗<sup>唐</sup>四五年中。於鐘陵。作山居詩二十四章。放筆藁。被人將去。厥後或有散書于壁屋。或吟詠於人口。一首兩首。時々聞之。皆多字句舛錯。乾符辛丑歲<sup>6</sup>。避寇於山寺。偶全獲基本。風調野俗。格力低濁。豈可聞於大雅君子。一日抽毫改之。或留之。除之。修之。補之。却成二十四首。亦斐然也。蝕木也。槩山謳之例也。或作者氣合。始爲一朗吟之可也。

- (1) 乾道<sup>1</sup> 〔宋高僧傳〕卷三〇 (750・897a) は「乾寧」に作る。
- (2) 錢<sup>2</sup> 〔僧高僧傳〕(同前) は「錢氏」に作る。以下、引用の省略有り。
- (3) 五章八句<sup>3</sup> 〔宋高僧傳〕(同前) は「五章、章八句」に作る。
- (4) 得來和尚<sup>4</sup> 〔宋高僧傳〕(897c) は「蜀主常呼爲得來和尚」に作る。
- (5) 梁乾化二年<sup>5</sup> 後梁の乾化二年。西曆九二二年。
- (6) 自序<sup>6</sup> 〔禪月集〕卷三「山居詩」二十四首の冒頭(明末虞山毛氏汲古閣刊本<sup>7</sup>)、また四部叢刊初編 第四三冊・宋鈔本に附録。
- (7) 乾符辛丑歲<sup>7</sup> 唐の年号。西曆八八一年。

山居詩

釋魯州著

〔二〕可嘆人生行路難。利名憎愛積如山。幸有跌坐結廬依林下。不使夢魂至世間。落照穿窗風瑟瑟瑟瑟。唐詩。。斷崖通覓水兒。

瀑々水聲。庭枝菓熟漸將折。猿子群來任手扳音挽。引。。

行路難 古樂府有行路難。晉遠山松傳遠山松傳。旧歌有行路難。山松好之。乃文其辭句。每因酣醉。縱歌之。聽者

莫不流涕。又天衣懷禪師頌云。行路難。行路難。萬仞峰前著眼看。

跌坐坐禪儀。結跏趺坐。先以右足安左脛上。左足安右脛上。云々。王維詩王維詩。嫩草承跌坐。長松響梵聲。

瀑々 佛鑑勳禪師頌言佛鑑勳禪師頌言。青々入坐當軒竹。黯々遮門對面山。更有一般堪羨處。夜深流水響瀑々。

菓熟 大法眼禪師圓成實性頌言大法眼禪師圓成實性頌言。理極忘情謂。如何有喻齊。到頭霜夜月。任運落前溪。菓熟兼猿重。山長

似路迷。拳頭殘照在。元是住居西。

又類聚。普照禪師。僧問。如何是祖師西來意。師言。猴獼摘山菓。野鹿下田中。

(1) 兒「貌」の省略形。

(2) 遠山松「袁山松」の誤り。『晉書』卷三八(中華書局校点本・p2169)参照。

(3) 坐禪儀「禪苑清規」卷八(Z111・460c)所載。

(4) 王維詩「五律「登辨」一作新「覺寺」の第五、六句。

(5) 佛鑑勳禪師頌言「典拠未詳。佛鑑勳(一〇五九〜一一二七)は五祖法演の法嗣。

(6) 大法眼「頌言」。『大法眼文益禪師語錄』(Z119・500c)。

(7) 類聚「禪林類聚」(Z117)には見当たらない様である。同じ文章は『天聖広燈録』卷一八(Z135・390b)に見える。

〔二〕碧山萬疊萬綠休。遮莫年々霜萬頭。松架清風催逸興。竹林斜月照禪遊。寒温身上一僧服。今古人間幾蟹樓。只恐道朋誤相訪。不將莖菜洗溪流。

寒温一服

上 叢林盛事<sup>(1)</sup>

雪堂行禪師。括倉人。既剃染。乃往舒之龍門。依佛眼禪師。爲待者。一衲度寒暑。又且

養蝨。隣肩皆厭之。每於殿堂僻處坐禪。

蜃樓

天台書<sup>(3)</sup>

海旁蜃氣象樓臺。羅兵書<sup>(5)</sup>蜃形似螭龍。有耳有角。背鬣作紅色。腰以下鱗尽逆。噓氣成樓臺人物

之形。望之丹碧。隱然如在烟霧。將雨而即見。謂之海市。

道朋相訪

五燈会元龍山章<sup>(6)</sup>

洞山与密師伯。經由見溪流菜葉。洞曰。深山無人。因何有菜隨流。莫有道人居否。

乃共議揆草。溪行六七里間。忽見師羸形異貌云々。

(1) 叢林盛事上 || 「叢林盛事」卷上 (Z148・28d)。

(2) 括倉人 || 「叢林盛事」は「括蒼人」に作る。

(3) 天台書 || 「史記」卷一七「天台書」(校点本・p.133b)。

(4) 蜃氣 || 「史記」は「蜃氣」に作る。

(5) 羅兵書 || 典拠未詳。

(6) 五燈会元龍山章 || 「五燈会元」卷三「潭州龍山和尚」(Z138・60b)。

(三) 山上春深花正開。竟無客履印青苔。三間茅屋傾將倒。一片閑雲拂復來。瘦骨誰憐如病雀。<sup>(1)</sup> 禪心自笑似癡孩。蒲團睡覺支頤坐。幾許棲禽相喚廻。

癡孩

佛指通載南泉章<sup>(2)</sup>

曰。禪師太多。覓个癡鈍人。不可得。

(1) 雀 || 国字であり中国漢字には無い。「鶴」に同じ。

(2) 仏指通載南泉章 || 「仏指歴代通載」卷一六 (T49・633b)。

〔四〕松下焚香讀雜華華嚴。清風陣々篆烟斜香烟斜。栢陽時掬餅中水栢陽時。病眼徒看空裡花栢陽時掬餅中水。物外乾坤人不到。天然圖畫自應

誇。圓融境界無遮掩華嚴說圓融。何羨銀河乘木槎圓融境界。

〔餅中水〕會元開州刺史李嗣昌響葉山玄化。屢請不赴。乃躬謁之。執經卷不顧。侍者曰。太守在此。守性褊急。乃曰。見

面不如聞名。拂袖便出。山曰。太守何得貴耳賤目。守回拱謝。問曰。如何是道。山以手指上下。曰。會麼。

守曰。不會。山曰。雲在青天。水在餅。守忻愜。作札而述偈曰。鍊得身形似雀形。千株松下函函經。我來

問道無餘說。雲在青天水在餅。

〔空裡花〕即覺經文殊菩薩章譬彼病目見空中花及第二月。善男子。空實無花。病者妄執。由妄執故。非唯感虛空自性。

亦復迷彼實花生處。由此妄有輪轉生死。故名無明

又皈宗常禪師。僧問。如何是佛。師云。和尚重言焉。敢不信。師云。只你是。云。如何保任。師云。一翳

在眼。空花亂墜。其僧於此有省

〔乘木槎〕博物志有人居海渚者。年々八月有浮槎。去來不失期。好奇者。多齋糧乘槎而去。十餘月至一處。有

城郭如州府。望宮中有一女。一丈夫率牛飲河。問。此處何處。答曰。君還蜀都蜀。訪嚴君平則知之。因還至

蜀。君平曰。某年某月。客星犯牽牛。宿計其年月。正此人到天河時也。

(1) 栢陽伯陽に同じ。

(2) 會元開州刺史李嗣章五燈全元卷五 (Z138・89a~b)。

(3) 圓覺經文殊菩薩章圓覺經 (T17・913b)。

(4) 感圓覺經は「惑」に作る。

(5) 又皈宗常禪師歸宗智常と芙蓉畫訓の問答。『景德伝燈錄』卷一〇 (T51・280c)・『五燈全元』卷四 (Z138・71a~b)。

(6) 博物志博物志卷二 (指海本・p.19)。

(7) 月二「博物志」は「日」に作る。  
(8) 郡二「博物志」は「郡」に作る。

(一五) 山肴野菜味相兼。石鼎煎茶高捲簾。藍縷藍縷半肩縦我嬾。青灰滴面免人嫌。咽巖迸水流無盡。傍岸閑花看不厭。杜宇啼過東嶺外。薰風習々日緘々。

(一六) 獨坐山中春又秋。放憨幸免謁王侯。三條皮篋罵惟儼。一个風瓢笑許由。明月團々離海淨。寒蛩唧々入窗啾。百年倏忽黃梁夢。隨意白霜上我頭。

免謁王侯梁高僧傳盧山遠法師章晋安帝自鄂渚還都。法駕過潯陽。詔遠見於頓所。遠不奉詔出山。

三條皮篋會元乘一日馬祖問。子近日見處作麼生。師曰。皮膚脱落盡。唯有一真實。祖曰。子之所得。可謂協於心體。布於四肢。既然如是。將三條篋。束取肚皮。住山去。

風瓢華上許由隱箕山。無盃器。以手捧水飲之。人遺一瓢。得以操飲。々訖掛於木上。風吹漑々有声。由以為煩遂去。

黃梁夢陳留異錄開元中。道士呂翁。經邯鄲止。有邑少年盧生。同止于邸。主人蒸黃梁。共待其熟。盧生不覺長嘆。呂翁問之。具言生世因厄。翁把囊中枕。授生曰。當富榮如願云々。身入枕穴中。未幾。登高第。出入五十年。子孫皆榮盛無比。上疏曰。臣踰八十。位歷三台。永辭聖代。其人卒。盧生欠伸而寤。呂翁在傍。黃梁未熟。生謝再拜云々。

(1) 梁高僧傳盧山遠法師章二盧山慧遠の伝は「高僧伝」卷六(150・357c~361b)にあるが、このままの文章は見えない。  
(2) 會元乘山章二「五燈全元」卷五(2138・82b)。



- (3) 逸士傳一一般に「逸士傳」は「魏書」列伝の項目を指すが、もとより許由の伝はない。「高士傳」卷上(古今逸史本・35-42)に許由の伝を載せるが、この話は見えない。「聚求集註」卷上「蔣詡三選、許由一瓢」(学津討原本・35)に「逸史傳」からの引用としてこの風飄の話を載せており、これからの又引きであろう。
- (4) 陳簡異聞録一未詳。「大漢和辞典」卷二の「呂翁枕」条(p.912)参照。

〔七〕冥々泉路有誰迴。深觀無生意如灰。何必安心在少室。若能轉物同如来。或隨樵者下巖谷。還愛鳴禽步石苔。破衲頽然時極目。千峰萬壑思悠悠。

泉路 冥々黄泉路。

少室

嵩山少林寺達磨所居也

西征記。(1)

嵩山三十六峰。東謂太室。西謂少室。相去十七里。嵩其總名也。謂之室者。其下

各有石室焉。

安心

會元(2)初祖達磨

章。二祖慧可曰。我心未寧。請師与安心。師曰。将心来。与汝安。可良久曰。覓心了

不可得。師曰。与汝安心竟。

轉物同如来

楞嚴經(4)一切衆生

從無始来。迷己為物。失於本心。為物所轉。故於是中。觀大觀小。若能轉

物。則同如来。身心圓明。不動道場。於一毛端。能含受十方國土。

(1) 西征記一未詳。

(2) 二二「一」の誤。

(3) 會元二初祖達磨章一「五燈會元」卷一(71.38・16a)。

(4) 楞嚴經一「首楞嚴經」卷一(T19・111c)。

〔八〕不堪吾道日陵夷。長住青山白髮垂。石上看經迎素月。炉中煮茗折栢枝。有餘仙菓松千樹。無尺僧衣荷一池。可笑綵雲多變態。隨風逐水欲何之。

〔陵夷〕

〔一〕言王道頹替。若丘陵之漸平也。

〔一〕字彙〓書名。梅賾祚撰。十二卷。

〔九〕成得功名徧九垓。千年枯栢掩泉臺。實泉臺。只須的々明斯意。即是如々契本來。日影長垂溪上柳。春風微笑屋双梅。

空山寂寞無人到。自有林庭麋鹿陪。

〔如々〕

〔一〕實義四。佛言。夫如々者。謂是內所證知之法。不可文字所顯示。所以者何。是法一切語言道斷。文字

章句所不能證。乃至是名實際。是名一切智。是名一切種智。亦名不可思議境界。亦名無二界。

〔一〕宝雲經四〓〔大乘宝雲經〕卷四 (T16·260c)。

〔一〇〕開窗戶外層峦聳。拾翠林間小徑通。打坐徒消春日永。住菴何做古人風。三盃苦茗黑甜後。一榻寒雲薄暮中。好

去諸方行脚士。峨嵋西也五臺東。

〔黑甜〕

〔一〕東坡詩。一枕黑甜餘。注黑甜。眠也。

〔峨嵋五臺〕

〔二〕僧辭。師問。甚處去。云。峨嵋山札普賢去。師豎起拂子云。文殊普賢。總在這裡。僧画一圓相。

拋於背後。却展兩手。師云。侍者將一貼茶与這僧。

〔一〕密〓〔密〕の略字。

〔二〕東坡詩〓〔集註分類東坡詩〕卷一〔発広州〕(四部叢刊本・22b)。

〔三〕僧辭。…〓〔師〕は大隨法真禪師。〔五燈云元〕卷四 (2138·77a) 〔景德伝燈錄〕卷一一 (T51·286b)。

(二) 為僧先可避囂塵。不管涑明眉宇顰。政老從來林下客。支公豈是世中人。曉雲夜月供吾用。綠水青山誰與新。寥廓乾坤知己少。此時此境若何陳。

**淵明** 檀羣雜記<sup>1</sup> 遠法師結白蓮社。嘗以書招陶淵明。陶曰。弟子性嗜酒。法師若許飲。即往矣。遠許之。遂即造焉。遠因勉入社。陶攢眉而去。

**政老** 林間錄<sup>2</sup> 餘杭政禪師。住山。標致最高。時蔣侍郎堂。安錢塘。與師為方外友。師每來謁之。則跨一黃牛。世稱政也 掛角上。市人爭觀之。師自若也。至郡庭。始下牛。笑語終日而去。一日蔣公留師曰。

適有過客。明日府中當有會。吾師固不飲。能為吾少留。一日因欲清話。師諾之。蔣公喜甚。明日使人要之。留一榻而去矣。曰。昨日會將今日期。出門倚杖又思惟。為僧口合居岩谷。國士筵中甚不宜。坐客皆仰其高韵。又作山中偈云。橋上山萬層。橋下水千里。唯有白鷺兒。見我常來此。

**支公** 世說<sup>3</sup> 晋支遁。字道林。愛剡東印山。就深公買之。深公笑曰。未聞巢田買山而隱。

(1) 檀羣雜記未詳。

(2) 林間錄「林間錄」卷下 (Z148·318c~d)。

(3) 世說「世說新語」卷下之下 (借陰軒叢書本·8a)。

(三) 暑退涼來秋色成。清風滿院木犀馨。林間苔滑三生石。巖下松埋千歲苓。何事晦堂眠白日。誤教魯直認金餅。蕭蕭 分明此意吾無隱。證得方知心地寧。

**木犀香** 羅澗野錄<sup>1</sup> 大史黃魯直。元祐間丁家難。館黃龍山。從晦堂和尚遊。晦堂因語次。拳孔子問弟子。以吾為隱乎爾。吾無行而不与二三子者。是丘也。於是請公注譯而至再。晦堂不然其說。公怒形於色。沈默久之。

時暑退涼生。秋香滿院。晦堂乃曰。聞木犀香乎。公曰。聞。堂曰。吾無隱乎爾。公欣然領解。

**千歲苓** 博物志<sup>②</sup> 松柏脂入地。千歲化茯苓。

**苔滑** 三平忠禪師<sup>③</sup> 僧問。還有學路也無。師云。有一路滑如苔。學人躡得不。師云。不擬心。汝自看。

(1) 羅湖野錄二『羅湖野錄』卷上 (Z142·482a-b)。

(2) 博物志二『博物志』卷七 (指海本·p.44)。

(3) 三平忠禪師二『景德伝燈錄』卷一四 (T51·316c)、『五燈會元』卷五 (Z138·90b)。

〔三〕四面山厠月上遲。此中消息便誰知。披雲大嘯甚奇怪。拂袖直行落便宜。湫水清水流供飲啄。稜々病骨懶撐支。衲衣風冷秋將尽。耳分樂天更不疑。

〔四〕昔時帽子有烏紗。弊去頭顱晒夕霞。洞口風來雲片々。林中日暖鳥楂々。食終孤策隨流水。眠足閑窗對落花。堪笑堪悲浮世事。是非愛惡乱如麻。

**烏紗** 帶文<sup>①</sup> 朝帽掛烏紗。 繫<sup>②</sup> 龐居士。一日向丹霞前。叉手立。少時便入方丈。士云。汝入我出。未有事在。

霞云。這老翁出々入々。有甚了期。士云。略無此子慈悲。霞云。引得這漢。到這田地。士云。把甚麼引。霞乃拈起居士幞頭云。却似一个老師僧。士却拈幞頭安霞頭上云。一似个少年俗人。霞應諾三声。云々。猶有昔日氣息在。霞乃抛却幞頭云。大似个烏紗巾。士乃應諾三声。霞云。昔時氣息爭忘得。士彈指三下云。動天動地。

(1) 柳文二柳宗元『註釈音聲唐柳先生集』卷四二『同劉二十八院長述旧言懷感時書事奉寄澧州張員外使君五十二韻之作因其韻增至八十通贈二君子』(四部叢刊本·3b)。

- (2) 類聚 || 『禪林類聚』卷一 (Z117・5d~6a)。  
 (3) 云々 || 『禪林類聚』は「土」に作る。

〔二五〕怪石奇岩屋後欹。松風吹滿蒨蘿扉。白雲滲澹埋幽谷。緑樹陰森帶夕暉。汲水時看飛鳥影。聞歌忽遇牧童歸。長年自有禪餘興。且喜山深過客稀。

〔二六〕四山高聳入蒼冥。變改長看黃又青。寒鳥或時來覓食。神龍每夜潛聽經。鄉遥却喜塵緣遠。水淨殊知地脉靈。嗟爾汨羅江上客。悠悠浮世獨能醒。

〔寒鳥神龍〕會元<sup>1</sup>牛頭山融禪師章。師後入牛頭山後幽棲寺北岩之石室。有百鳥啣花之異。又林間録云。巖陽<sup>3</sup>尊者。单丁住山。蛇虎就手而食。

〔汨羅〕屈原<sup>4</sup>。字平。為三閭大夫。上斬。向讚毀於王。流於江南。楚終不見省。遂赴汨溇而死。云々。文選。〔五〕漁父辭。屈原曰。世人皆濁。我獨清。衆人皆醉。我獨醒。

- (1) 會元 || 『五燈會元』卷一 (Z138・21a)。  
 (2) 後 || 『五燈會元』に無し。衍字であらう。  
 (3) 又林間録云 || 『林間録』には見当たらない様であるが、同様の事柄は『禪林類聚』卷五 (Z117・32d)、『五燈會元』卷四  
 「洪州新興嚴陽尊者」条 (Z138・79b) に見えている。  
 (4) 屈原 || その伝は『史記』卷八四 (校点本・p.2481) に見える。  
 (5) 文選。漁父辭 || 『大臣註文選』卷三三 (四部叢刊本・9b)。

〔二七〕若覺了時何却了。即今休去直須休。總無善意馴崖虎。纔有機思飛海鷗。一片白雲橫谷口。半輪明月上峰頭。飢  
冷渴飲眞消息。不管此心剛与柔。

〔馴崖虎〕

會元三華林  
禪學禪師章

觀察使裴休訪之。問曰。還有侍者不。師曰。有一兩個。祇是不可見客。裴曰。在什麼處。

師曰。喚大空小空。

時二虎自菴後而出。裴觀之。驚悸。師語二虎曰。有客且去。二虎哮吼而去。

〔飛海鷗〕

海上之人有好鷗鳥。每旦之海上。從群鷗遊。鷗鳥之至者。百數而不止。其父曰。取來。吾玩之。

明日之海上。鷗鳥舞而不下。

〔飢冷渴飲〕

禪林類聚 崇勝捷禪師。僧問。如何是諸佛出身處。師云。長連床上。云。未審如何履踐。師云。飢

冷渴飲。

(1) 會元三〇〇【五燈會元】卷三【潭州華林普覺禪師】条 (Z138・57c)。

(2) 禪學Ⅱ【普覺】の誤り。

(3) 列子Ⅱ【列子】黃帝第二(岩波文庫本・上冊・p.96)。

(4) 禪林類聚Ⅱ【禪林類聚】には見当たらない様である。崇勝文捷は那耶慧覺の法嗣。

〔二八〕不須炙也不須煎。山菓溪毛足自然。何管說禪談教律。豈妨呼馬作烏焉。亮公孤影人間落。常老高風天下傳。爭  
若濃頭帶雪。癡々兀々坐岩前。

〔烏焉〕

古詩云  
字經二寫。烏焉(成馬)。

〔亮公〕

僧人(2) 馬祖法嗣亮坐主。本蜀人也。頗講經論。後參馬祖。大悟乃隱西山。更無消息。

〔常老〕

同上(3) 馬祖法嗣大梅山法常禪師。初參馬祖。問曰。如何是佛。祖曰。即心即佛。師乃大悟。遂之四明

梅子眞旧隱。縛茆燕處。

(1) 成馬成馬原文に無し。「字經三写、烏鴉成馬」という成句は、『禪林僧宝伝』卷二(2137・2636)等に見える有名な言葉。

(2) 傳灯八傳灯八『景德伝燈録』卷八(751・262a)。

(3) 同上同上『景德伝燈録』卷八(751・254c)。

〔一九〕霏々白雪飾幽畦。着屐徘徊茅舍西。寒劣宜兼樵牧住。1行藏豈与聖賢齊。朔風動地飛鴻斷。枯木倚巖寒鳥啼。日暮無人乘興至。吟筇回首立叢蹊。

行藏

猶日出處

(1) 住住原字は「徑」にも見える。

〔二〇〕春風蕭瑟宿雲排。幽鳥声々得克諧。數樹黃花浸澗水。一叢翠竹拂庭堦。仙翁携杖尋靈竹。猿子学禪坐斷崖。眼見耳聞非別事。時人多是自相乖。

猿子学禪

東山集有人定編猿猴入

昔有僧隱終南山。時失袈裟。有猿盜之。被其身。禪身2岩上。群猿傲之。

(1) 東山外集有人定編猿猴東山集有人定編猿猴雪峰忠空の『雪峰空和尚外集』一卷にある「終南山入定獼猴」の頌(五山版・22)を指す。合註本は未見。

(2) 身身原本は横に「坐」の字の書き込みが有る。

〔二一〕碧澗千尋如海湧。白雲萬丈与山齊。早晨鳴磬驚林鹿。亭午出門聽野雞。靜坐方知心起滅。經行殊覺地高低。牧童狂走去何処。向外覓牛迷轉迷。

亭午

午日中也。亭午也。

經行

秋氏要覽

慈恩云。西域地濕。疊磚為道。於中往來。如布之經。故曰經行。

覓牛

會元

長慶大安禪師章。造百丈。問曰。學人欲求成佛。何者即是。丈曰。大似騎牛覓牛。又石鞞禪師

章。師在厨下作務次。馬相問。作什麼。師云。牧牛。祖云。作麼生牧牛。師云。一回入艸去。驀鼻拽將來。

祖云。子真牧牛。

(1) 秋氏要覽下 = 「秋氏要覽」卷下 (T54·299a)。

(2) 會元 = 「五燈會元」卷四 (Z138·62a)。

(3) 又石鞞禪師章 = 「五燈會元」卷二 (Z138·53a)。

(二) 欲海欲愛河愛真涸渴。情波意識浪心豈滔灑夕灑。為憐嬾瓊食煨芋。却笑齊顛酌翠澗。古澗泥浚飾日細。薰風蕭

瑟入松高。綠蘿菴裡幾生夢。塊石枕頭纏弊袍。

嬾瓊

佛相通

南岳明瓊禪師亦云。不知何外人。初宰相李泌。乾元中唐肅宗入衡岳謁之。瓊曰。飯未。泌曰。未

也。撥火出芋食。與語久之辭去。瓊撫其背曰。做十年宰相。至是李泌感事。為帝言其高行。有詔徵之

云々。顯唐德宗聞其名。遣使者到其窟。宣言天子有詔。尊者宜起謝恩。師方撥糞火。尋煨芋食之。寒涕

垂々。未答。使者笑之。且勸拭涕。師云。我豈有閑工夫。為俗人拭涕耶。使者竟不能致之。帝聞倍加欽羨。

覺範洪頌云。糞火但知黃獨美。銀鈎那識紫泥新。尚無心緒收寒涕。豈有工夫問俗人。

齊顛

靈隱瞎堂遠禪師會下。有齊書記。性風顛。好飲酒。人稱齊顛。有齊顛傳。行于世。

翠澗

魏證能治酒。有醒泉翠澗二名。十年〔味〕不敗。綠蘿菴。



塊石枕頭 衡岳嬾瓊禪師歌云。世事悠悠。不如山丘。青松蔽日。碧澗長流。山雲當幕。夜月為鈎。臥藤蘿下。塊石枕頭。不朝天子。豈羨諸侯。生死無慮。更復何憂。

(1) 兒レ「貌」の略字形。

(2) 佛祖通載十四レ「仏祖歷代通載」卷一四 (T49・606b)。

(3) 撫レ原文に無し。「仏祖歷代通載」に拠つて補う。

(4) 類聚レ「禪林類聚」卷一一 (Z117・68a)。下の「菩提洪頌」も「禪林類聚」に續けて載っているが、文字に異向がある。

(5) 齊書記レ典拠未詳。

(6) 魏證レ「河東先生龍城録」卷下「魏證善治酒」(百川学海本・38)を踏まえる。

(7) 味レ「龍城録」に拠つて補う。

(8) 綠羅菴レ衍字。本文の注を付けようとして題目のみ書いたものであろう。

(9) 衡岳嬾瓊禪師歌レ「仏祖歷代通載」卷一四 (T49・606c)。

〔三〕 瑟瑟溪流如鼓絃。遏雲尚在古巖前。寒衣飢飡無勞力。落葉飛花不記年。幽鳥偶乘新霽晔。老年時帶夕陽眠。三皇五帝是何物。此樂勝於自在天。

遏雲〔1〕 秦青歌声遏雲。

博物志〔1〕

自在天〔2〕 法華入疏〔2〕 大自在者。即欲界第六天也。是欲界極天之頂。欲得境時。自能變化五欲。故得自在天名。

法華入疏〔2〕

(1) 博物志レ「博物志」卷五(指海本・p.30)。

(2) 法華入疏レ「法華經入疏」卷一 (Z17・16b~c)。

〔四〕 一念無生全體現。片時不在死人同。當頭穩坐毗盧頂。任運經行兜率宮。方丈室中藏世界。半升鑪内煮虛空。

休々勿問山居趣。洞口吐雲何日窮。

**毗盧頂** 名義集 毗盧舍那。此云遍一功處。類聚 唐肅宗皇帝問忠國師。如何是無諍三昧。國師云。檀越踏毗盧

頂行。帝云。寡人不曾。師云。莫認自己清淨法身。

**兜率上宮** 弥勒菩薩所居

**方丈室** 祖庭事苑 今以禪林正寢為方丈。蓋取則毗耶離城維摩之室。以一丈之室。能容三万二千獅子之坐。有

不可思議妙事也。唐王玄策為使西域。過其居。以手版縱橫量之得十笏。因以為名。

**半升鐘** 呂洞賓詩。一粒粟中藏世界。半升鐘內煮山川。

**洞口吐雲** 鹿門燈禪師。僧問。西天解夏以蠟人為驗。師云。雨來山色暗。雲出洞中明。

(1) 名義集 〔翻譯名義集〕卷一 (T54・1059a)。但し「梵本盧遮那。此云光明遍照」となっている。

(2) 類聚 〔禪林類聚〕卷一 (Z117・3c)。

(3) 祖庭事苑 〔祖庭事苑〕卷六 (Z113・89a～b)。

(4) 呂洞賓詩 〔金丹詩訣〕卷上 (玉顏堂秘笈本・6b～7a)。但し「半升」を「二升」に作る。

(5) 鹿門燈禪師 〔典故未詳〕。〔五燈会元〕〔景德伝燈録〕の鹿門法燈の条には見えない。〔雨來山色暗。雲出洞中明〕の句自体は〔天

聖広燈録〕卷三〇〔湖州何山宣化院惠忠禪師〕条 (Z135・451a) に見えろ。